

氏名・(本籍地)	小林 崇仁(長野県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第91号
学位授与の日付	平成30年3月15日
学位論文題目	日本古代における仏教者の山林修行
論文審査委員	主査 苫米地 誠一 副査 堀内 規之 副査 蔵中 しのぶ

小林 崇仁氏 学位請求論文審査報告書

「日本古代における仏教者の山林修行」

論文の内容の要旨

本論文は、奈良時代から平安時代初期という律令制下における仏教者の山林修行について、これまで主に語られてきた歴史学からの研究に対して、仏教学の立場から改変・修正を求めるものとなっている。

序論では、歴史学を中心としたこれまでの研究を総括し、民俗学・宗教学の分野では、修験道の前史として仏教以前の日本古来の山岳信仰や民間宗教者を措定した上で、その系譜上に仏教者の山林修行を位置づけているとする。また歴史学の分野からは、国家仏教という枠組みから山林修行を論じ、山林修行の呪術性が学解中心の国家仏教を支える基盤であったとの見方を提示していると指摘する。また近年では考古学の分野より、山岳寺院の発掘調査が進展し、国分寺や有力な私寺に併設された山寺の存在が指摘されているとしながら、「山林修行に関する社会史的あるいは考古学的視点による研究は進展したものの、宗教的な文脈における理解、つまり山林修行の主たる実践者であった僧たちの信念や目的意識、あるいはそれを護持した為政者や諸人の仏教信仰、さらには仏教史全体から見た当時の山林修行の特徴など、仏教学の視点からの考察は必ずしも充分とは言えない」と主張し、先行研究の問題点を指摘し、思い込みによって語られてきたイメージの修正を、仏教学の立場から求めている。

方法論としては、当代の山林修行者として伝承される九名(泰澄、報恩、施暁、玄寶、聴福、満願、勝道、徳一、勤操)を取り上げ、その人物研究・伝記研究を主体としながら、但し史料的に不明な点は客観的に確認している。その上で、当代史料から分析できる仏教者の有り様と比較し、その個人のイメージとして語られる内容が矛盾したものでは無いことを論証し、その上で当代の仏教と山林修行者の実際を分析し、その様相と意義を論じている。

第一章では、奈良期に山林修行を行ったと伝承される僧のうち、泰澄・報恩・満願の三者を取り上げている。泰澄は白山の開山とされるが、その史実性が判断できないことを指摘し、但しその伝記には奈良末期における山林修行者の典型となる要素を多分に含み、古代の山林修行者像を考察する上で、参考となるとしている。

報恩は吉野山を中心に山林修行をし、天皇の病気を治癒して信任を得たとされるが、その伝記の史実性は高いとし、山林修行による清浄性と呪術性が当時の為政者や諸人の期待したものとす。

鹿島・箱根・多度などに神宮寺を建てた満願の伝記から、仏道修行のために山林の霊地に入った者にとって、山林に住む神祇は自然的障難を与える畏怖すべき存在であり、その神祇を鎮め、その加護を得るべく、読経や写経、さらには神宮寺の建立を発願した可能性を論じ、また在地の人々にとっても神祇は脅威であり、地域の安定を願い、仏教者の山林修行と神祇供養を支援したものと論じている。

第二章では、山林修行を通じて朝廷から信任を得た施暁・玄寶・聴福を取り上げている。施暁は朝廷に山林修行の支援を求める奏上を行った僧で、桓武期を代表する山寺である梵釈寺の

初代とされる。施暁の奏上と梵釈寺造営の詔勅から、仏教者は自他の菩提を求めて山林修行を志し、天皇にその支援をもとめ、また天皇も仏法による利益を願って、仏教者の山林修行を外護するという、両者の相依関係が窺えることを指摘している。

玄奘については、嵯峨天皇の玄奘に対する傾欽と殊遇は古代においても特別であり、当時の為政者たちが山林修行者の出世間性に敬意を持ち、その呪術性に期待していたとする。

聴福は桓武天皇の不豫平癒のために紀伊国伊都郡に三重塔を建て、嵯峨天皇から信奉された僧であるが、やはり為政者や諸人が期待した仏道修行に懈怠ない有行有徳の高僧であったとする。

第三章では、山林修行に続いて広く利他の実践を行った僧として勝道・徳一・勤操を取り上げる。勝道は下野国日光山の開山であり、後に上野国講師や寺院建立、日光山での祈雨など様々な活動を行っている。そして霊山に入って自利行を積み、再び世俗に還って利他行に励むというあり方は、最澄や空海、さらには後の修験道にも引き継がれていく構図の先例となるとしている。

徳一は法相学僧として名高く、東国に斗薮して磐梯山慧日寺を建立して民衆の教化につとめ、菩薩と称された。その伝記から、当代の人々が修行者の利他行のみならず、持戒・山林修行・修学などの自利行にある種の超越性を認め、戒定慧に裏付けられた自利行が利他行へと展開する姿を、仏の化現、つまり衆生済度のために現世に現れた菩薩として信奉していたとする。

勤操は僧綱に昇った三論学僧であるが、吉野山に修行し、法会の執行や困窮者の済度、築池の事業など、朝野にわたる多様な活動を行っていたとする。そして勤操の事績には日本初例となるものも多く、種々なる菩薩行に励んだ勤操は、平安期に広まる仏教信仰の基礎を築いた人物のひとりであったと位置づけている。

第四章では、山林修行に関して「斗薮」「乞食・蔬食」というの問題を取り上げている。霊地を求めて山林を跋涉する「斗薮」本寺や山寺に止住しての修学や修禪と共に、仏道修行の重要な一側面とされていたとする。また山林修行の財源や食事法に関する問題として、インド・中国における「乞食・蔬食」は積極的に実践されなかった可能性を論じ、日本の山林修行は、世間と断絶した形では存続しえず、多分に社会性を帯びたものであり、国家に認められた田地や供料、あるいは檀主の依頼による法会の布施など、社会的な経済基盤によって継続し得た可能性を指摘している。

以上の論述に基づき、奈良末・平安初期において、当代の仏教を牽引した僧たちは、山林にて仏道修行に励んでおり、山林修行は自他の菩提を求める菩薩行の一環とみなされ、仏教者は出世間を志して山林の霊地に入り、さらに修行で培った功德や験力をもって、世間に利他の実践を行ったとする。朝廷はそうした山林修行者の清浄性と呪術性を信奉し、国家の安定や衆生の菩提を期待して経済的に支援した。そして山林や世間における仏教者の幅広い活動が、それを受容する人々の信仰や思惑と相俟って、古代社会に大乘仏教が浸透する契機となったとする。

審査結果の要旨（1200字以上）

以下、次の項目に従って審査結果を述べる。

- ①体裁・構成
- ②表記・論述形式・方法論
- ③内容
- ④学術的意義
- ⑤結論の妥当性
- ⑥準備審査の結論

①体裁・構成

本論文はA4縦・横書き・1頁字数1600字・総頁数301頁で、400字詰め原稿用紙に換算すると1204枚となる。改頁による余白は見当たらない。

本論文の構成は、首尾に序論と結論を配し、4章11節からなり、1節は2から11の項からな

る。整然とした配列で、目次を通観することで論文全体の論述の流れが俯瞰・把握できる構成となっている。また、それぞれの節にはまとめが付されており、次章・次節への読解を容易にし、便宜をはかっている。巻末に「初出一覧」が付されており、著者の考察の流れを確認することができる。さらに、頁の右上に章節とタイトルが明示しており、配慮された体裁となっている。

②表記・論述形式・方法論

表記は適切な長さのセンテンスとなっており、文章のねじれや主述の消失なども見当たらず、変換ミスや誤字・脱字も僅かである。また論理の飛躍も認められず、手堅い論述となっている。序論に「本研究の視座と課題」「本研究の方法と構成」の節があり、事前に論文全体の概要を述べ、以後の読解に資する形式は、有効な論述形式として評価できる。著者が用いる基本的な方法論はいわゆる実証的考察方法で、基礎史料の精読をもとに先行研究を吟味して援用、考察する方法を用いている。手堅い方法で説得力が認められる。また序論において「専門用語」の概念規定を行い、厳格な考察を行おうとしている姿勢が確認できる。加えて古代研究の研究者が直面する現存史料の有限性という限界を熟知した上で、考察を重ね、仏教学の新たな地平を開こうとする真摯さが認められる。

③内容

本論文は、奈良から平安初期における仏教者の山林修行の特徴を、仏教学の視点から考察したものと押さえることができよう。具体的には、これまで余り取り上げることの少なかった泰澄、報恩、施暁、玄賓、聴福、満願、勝道、徳一、勤操の九名を取り上げ、これらの人物の生涯を、現存の史料をもとに考察を加えることで、古代山林修行者の実態、総体を明らかにしようとした論考といえる。

④学術的意義

仏教学からは扱われることの少なかった古代僧侶の山林修行の実態を解明したことは、歴史学の分野からのみ語られてきた古代仏教教団の在り方や、王権と出家教団の関係性に関する「定説」に書き換えを迫るものであり、また或いは古代における仏教信仰の具体相を提示するもので、平安期以降に展開する日本的な「宗」仏教の前史として、その成立基盤を解明したものと評価されよう。

また第4章「山林修行の種々相」は、平安後期・鎌倉前期の文人僧侶（山林修行者）研究の前段階となっており、本論文が提供する考察・結論は、日本文学研究においても有益な研究となろう。

このように本研究は仏教学の立場から日本古代の仏教を解明したものであるが、単に仏教学に留まらず、歴史学・国文学・民俗学などの関連諸分野においても極めて有益な成果といえよう。

⑤結論の妥当性

すでに指摘したように、本論文は研究の視座と課題、それに対象が明確で、研究の方法も論理的で、手堅い論述となっている。したがって、そこから導き出された結論は、論理の飛躍もなく、極めて説得力がある。また、導き出された結論は、次の時代の研究に有益な緒を与えるものとなっている。本論文の結論が正鵠を射ているからであろう。また、掲載雑誌の査読も受けており、学術的に承認された論考ともなっていることを付け加える。

ただ一部に山の神祇の問題や、山林修行における山居と斗藪の問題、或いは仏教者における仏法と道教の問題など、不明瞭な点も残るが、今後の研究の進展に期待したい。

⑥審査の結論

以上、本論文は、論文としての形式において、論述に破綻無く、論旨も明確で、一貫しており、誤字・脱字等も殆ど見られない。またこれまでの先行研究を網羅的に総括しながら、それらにおける問題点を指摘し、仏教を信仰するものとしての立場から見た「山林修行」の問題を論ずる。資料の分析にあつては、歴史学や仏教学だけではなく、文学研究における説話研究の方法論なども援用し、厳密・客観的な文献操作によって論じている。それにより当該問題において全く新しい視点を提示するものであり、これまでの定説を書き換える重要な研究といえるもので、論文博士の学位に相応しいものと評価されよう。